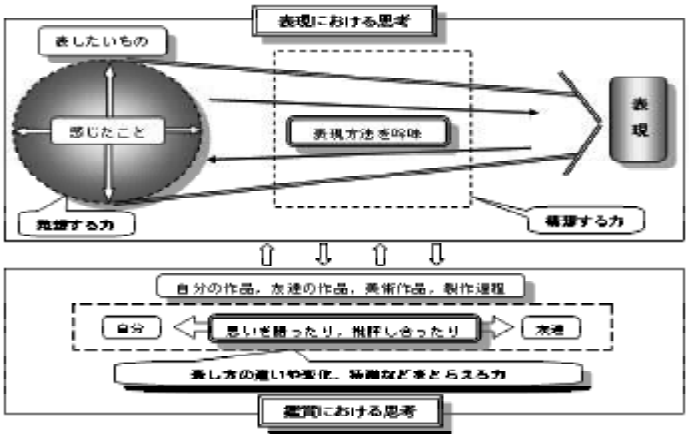
図 画 工 作 科

1　育成したい「思考力」

a　感じたことを基に，多様な観点でイメージを深めたりアイデアを広げたりし（発想する），表したいものを実現可能なものにするために，表現方法を吟味する（構想する）力
b　感じたことを話す，聞く，友達と話し合うなどして，表し方の違いや変化，特徴などをとらえる力

図画工作科では，「表現」においては，「こんなものをつくろうか」「どんなアイデアがあるか」という発想する力と，「表したいものを実現するためにはどのような方法が適しているか」という構想する力が思考の中心となる。

一方「鑑賞」においては，友達と交流しながら，形や色などについて「前の表し方との違いは何か」「なぜそのように感じるのか」と，表し方の変化や特徴をとらえる力が思考の中心となる。



（１）感じたことを基に多様な観点でイメージを深める・アイデアを広げる（発想する力）

○　イメージを深める力

イメージを深める力とは，表したいイメージを具体的に思い描く力のことである。例えば，花の絵を描くとする。はじめは概念的で記号のような花（例：チューリップ→ ）を思い浮かべる場合が多い。しかし，その花がいつ，どんなところに咲く花なのかといった「時間的」「空間的」な観点をもつことで，花やその周りの様子がより具体的になる。そのことによって，だれもが思い描く一般的な花から，自分が表したい，感性豊かに思い描いた固有の花になるのである。

○　アイデアを広げる力

例えば，無造作に紙をちぎる。すると，その紙の形が動物に見えることがある。さらに，紙を斜めに置いたり裏返したりした時，全く別のものに見えてくる。このように「向きを変えたら」「裏返したら」等の方法をもってアイデアを広げていく力のことである。上記の花の例では，「花びらの色を変えてみたら」「大きくしてみたら」「向きを変えてみたら」等，感性を働かせながら，描く対象を形や色等にかかわる観点から見つめ直すことで，アイデアを広げていくことができるのである。

（２）表したいものを実現可能なものにするために，表現方法を吟味する力（構想する力）

広がり深まった発想から表現したいものを決め，表現方法を試しながら表したいものを表現可能なものにしていく力である。「○○の色より□□の色を使った方がぴったりするかもしれない」などと，表したいことと材料や場所等の特徴，構成の美しさや視覚的な効果などを照らし合わせながら表現方法を取捨選択していくことで，表したいものが実現可能なものとなる。

（３）感じたことを話す，聞く，友達と話し合うなどして，表し方の違いや変化，特徴などをとらえる力

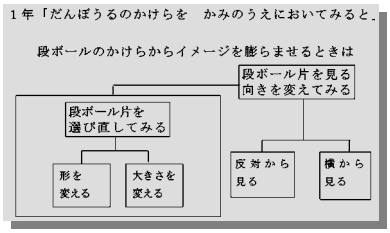
鑑賞において，子どもたちは，自分の作品を改めて見直したり，友達の作品や美術作品，製作過程を見たりして，さまざまな感じ方をする。それについて話したり友達と話し合ったりする際，単に「こっちの方がいいです。」ではなく，形や色，材料，用具の使い方とつないで話し合わせることで，表し方の違いや変化，特徴をとらえる力が育つと考える。そのためには，「○○な感じを表すために□□を使ったよ。」「この部分に△△色を使っているから，…な感じがよく表れているね。」「ここを大きくかいたのは，きっと…を表したかったからだ。」など，造形的な言語を介しての話合いが必要になる。

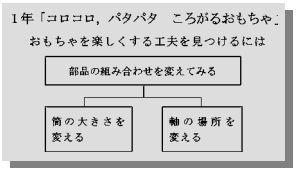
2　「思考力」を育成するための思考様式

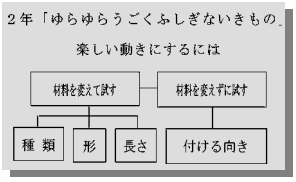
発想する力

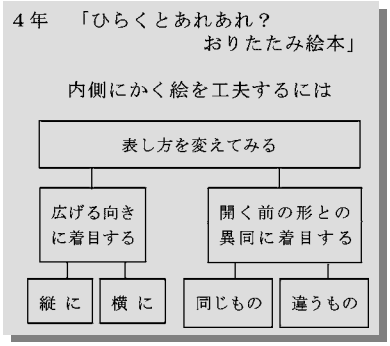
アイデアを広げる

形や色，材料，用具を試す









3年「つないでつないで
ストロージャングルジム」
つなぎ方の向きや位置を変えてみる

4年「風に乗って旅しよう」
形や色，配置に着目してアイデアを広げる

イメージを深める

言語化

3年「夢の城へようこそ」
表したいものの形や色のイメージを，物語の内容とつないで深める

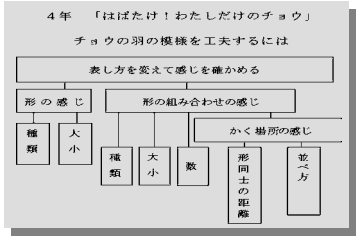
5年「どんなカンジ，
漢字アレンジ」
表したいものを，具体的な言葉に置き換えてイメージを深める

5年「つくれるよ
ふしぎな世界」
対照的な感じを表す言葉を手がかりにして，形や色のイメージを深める

構想する力

表現にかかわる要素と効果に着目して

形や色



5年「つくれるよ，
ふしぎな世界」
様子の違いを表すのに効果的な形や色を見つける

5年「光とかげ」
色の組み合わせを変えて，見え方の違いを比べる

5年「季節のとびらを開けて」
イメージと表現のつながりを，形，色からとらえる

6年「通りぬける光」
形や色の組み合わせや並べ方の見え方の違いを比べる

しくみ

6年「厚紙をつないで動く絵」
つなぎ方による動きの違いを比べる

つくっていく過程で

部分から

3年「夢の城へようこそ」
基本になる形をつないだり付け足したりして，イメージを表す

全体像から

3年「住んでみたいな夢の家」
大まかな形に置き換えて，イメージを表す

材料・用具

4年「風に乗って旅しよう」
イメージに合う表現を，用具や材料の特徴から選び直す

表し方の違いや変化、特徴などをとらえる力

作品を鑑賞して（つくる前）	つくっていく過程で	できあがった後で

※　鑑賞を中心とした実践は，これまで行われていないので，空欄になっています。

※　これらの思考様式は，実践の一部であり，全てを掲載しているものではありません。

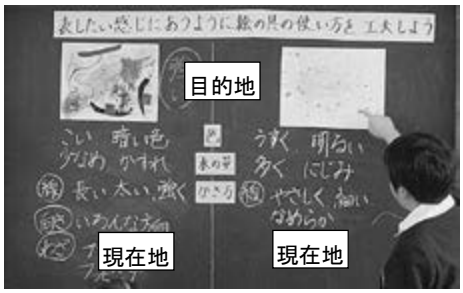
３　図画工作科におけるユニバーサルデザインの働きかけ

（１）思考対象を「図」とするために

①　情報を精選し，選択の場を設定する

第５学年「消えた！光った！不思議な絵でショートストーリー」では，前時までに，子どもたちは水彩絵の具と蛍光性の絵の具を用いて線や点等を同じ画用紙上にかく材料体験を行い，ブラックライトを当てたときと通常の光が当たっているときとでは，見え方に違いがあることに気が付いていた。本時は，その中で偶然生まれた見え方の違いからおもしろさを感じた子どもに，「お話に合わせた形や色の組み合わせ」を考えさせた。その際，様々な変化のパターンの中で，特に変化が顕著に現れる３つ作例（①形が付け足される，②形が別のものになる，③色が際立つ）を提示し，それぞれについて変化が現れる理由を話し合わせた。そして，その中からお気に入りの変化のパターンを選択させてお話を絵に表させた。作例をしぼり，選択させることで形や色の組み合わせ方という思考対象が強調された。

②　板書に思考の目的地と現在地を示す



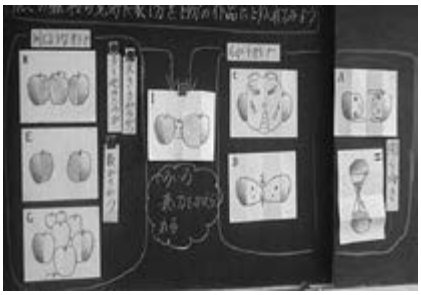
第４学年「風に乗って旅しよう」で試しの作品を振り返る際，作例を思考の目的地として２つ並べて提示し，それらのイメージを述べさせた。すると，「濃い色で勢いよく線をうねらせると強い風になる。」「薄い色であまりうねらさずに描くと弱い感じになる。」などの反応が生まれた。それらを「筆遣い」「線の色」「水の量」の視点ごとに整理しながら２つの絵の間に，思考の現在地として位置付けた。このことにより，話し合いの過程がとらえやすくなり，学習問題「絵の具や筆の使い方を工夫しよう」が強調され，「形や色，配置に着目する」思考様式を活用しながら鑑賞し合うことができた。

（２）思考様式を「図」とするために

①　指導方略の組み合わせにより，思考の方法を強調する

第１学年「コロコロ，パタパタ　ころがるおもちゃ」で作例を鑑賞する際，筒にさす竹ひごの位置の違いによる絵の部分の動きが異なることをことばで説明するのは難しい。そこで，絵の動き方を手で表現させるとともに，オノマトペを用いて言語化させた。これにより，竹ひごの位置関係を左右の手の位置で表すとともに，「グルーン，グルーン」「グル，グルーン」など，音声として絵の動き方を再現することができた。このような視覚と聴覚に訴えかける指導方略を組み合わせることで，「筒の大きさや軸の場所を変える」という思考の方法が強調され，付ける材料の大きさや位置を工夫することができた。

②　板書に動きをもたせることにより，思考の視点を強調する



第４学年「ひらくとあれあれ？おりたたみ絵本」では，絵本の内側に表す絵のアイデアが広がりにくい場合がある。そこで，前時までの試しの作品を板書上で子どもが操作しながら仲間分けをする場を取り入れた。それにより，絵の表し方の共通点が視覚的にとらえやすくなり，りんごと「同じような形で」と「違う形で」という大まかな視点が見出せた。次に，それぞれをさらに仲間分けさせていくことで，「大きさ」や「開く向き」といった細かな視点もあることが強調でき，「広げる向き・開く前との形の異同に目を付ける」思考様式のよさを感じ取ることができた。